

学位請求論文審査報告要旨

2017 年 11 月 8 日

学位請求者 張 成

論文題目 移行期における中国地域社会の文化と風俗の変容
——内陸農村の社会関係資本のあり方をとらえる

論文審査委員 糟谷 啓介
鈴木 将久
星名 宏修

1. 本論文の構成

本論文は、中国内陸に位置する三つの地域社会の現地調査をふまえて、社会関係資本の衰退という観点から、近年の中国における社会的・文化的規範の変容をとらえようとする作品である。本論文の構成は以下のとおりである。

まえがき

目次

序章 課題と方法

- 第1節 テーマの概要と社会背景
- 第2節 社会関係資本の定義と機能
- 第3節 先行研究
- 第4節 調査概要と調査地の概況
- 第5節 本稿の研究方法

第1章 地域社会における文化・行事と社会関係資本

- 第1節 文化と地域社会における伝統文化
- 第2節 事例調査
- 第3節 考察
- 第4節 小結

第2章 地域社会における娯楽文化——賭博蔓延に関する事情

- 第1節 賭博の定義
- 第2節 調査地の賭博現状と特徴
- 第3節 賭博参加者の心理と社会要因分析
- 第4節 賭博の社会関係資本への影響
- 第5節 小結

第3章 地域社会における風俗——義理と儀式の変容

- 第1節 義理の社会基礎

第2節 祝儀目的の`整酒風'に関する実地調査

第3節 地域社会の日常義理——`幫工'事情

第4節 小結

終章 総括

終わりに

謝辞

資料・参考文献

2. 本論文の概要

「まえがき」では、本論文が現代中国の地域社会における文化、娯楽、儀式などの変容を取り上げることに関する研究動機が簡潔に述べられる。

序章「課題と方法」の第1節では、本論文の問題設定が述べられる。それによると、本論文は、三つの調査地における伝統文化の衰退、娯楽の欠如、賭博の蔓延、儀式の奢侈化などの現象をとりあげ、社会関係資本という概念を導入することによって、中国地域社会における人間関係のネットワークの変化の背景を明らかにすることを目指す。第2節では、パットナム、ブルデューをはじめとする社会学者の説を援用しながら、「社会関係資本」という概念の定義が述べられる。それは、人間の行為を方向づける他者への信頼、互酬性、人的ネットワークから成る社会関係の総体である。第3節では、中国地域社会の文化、賭博現象、儀式の変容、社会関係資本のあり方に関する先行研究が紹介される。第4節では、調査方法に関する説明、三つの調査地に関する基本的情報、調査地の選択の理由などが述べられる。第5節では、本論文がインタビューを中心とした「エスノグラフィック・スタディ」という方法を用いることが述べられる。

第一章では、地域社会における文化・行事と社会関係資本のとの関係が論じられる。第1節では、文化の定義が述べられた後、中国地域社会における規範の維持に関わる文化の機能が論じられる。第2節では、事例調査として、村の住民とのインタビューが紹介される。そのなかでは、近年の地域社会では従来の互酬性の規範が働かず、「フリーライダー」が発生しやすくなっていること、住民が自分の出身地に対する敬遠感をもっていること、リーダーシップが不足していることなどが語られる。また、教育の荒廃、宗教的信仰の功利化、伝統的祭礼や文化行事の衰退などの現象がインタビューを通して描かれる。著者によれば、移行期にある現代中国の地域社会において問題となっているのは、相互の信頼に基づく社会を築くことが困難であり、互酬性の支えとなる社会関係資本が希薄化していることにある。

第二章では、地域社会における賭博の蔓延の現象がとりあげられる。著者が賭博に注目する理由は、賭博の参加者の増加や賭博に費やされる金額の巨大化はすでに地域社会に大きな影響をあたえており、賭博が社会関係資本を切り崩すひとつの要因として無視できないほどの重要性を帯びているからである。第1節で賭博の定義が述べられた後、第2節では、調査地における賭博の現状と特徴が描かれる。そこでは、賭博に参加する人間の数が多いこと（全人口の約八割がなんらかの形で賭博に関わっている）、そのなかから賭博のプ

ロと呼びうる人間が生まれていること、賭博が身内の楽しみだけではなく営利目的の経営になっていること、麻雀に関しては女性の参加者が圧倒的に多いこと、などが指摘される。また、賭博が行われる場所や賭博のやり方に関する調査結果が紹介される。第 3 節では、賭博に参加するひとびとの心理が論じられる。ひとびとが賭博に参加する理由は、暇つぶし、見栄、人柄の誇示、人間関係の構築、投機をも含む金儲けなどさまざまなものがあるが、その根底には、経済的・時間的余裕が生まれながら、それを適切な文化的行為に結びつける社会関係資本が不足していることにありと解釈される。第 4 節では、賭博が地域社会の信頼関係や家族関係に及ぼすネガティブな影響が論じられる。著者によれば、賭博の蔓延は、従来の社会規範を支えてきた伝統文化が衰退する一方で、それに代わる規範意識がまったく形成されていないことに原因がある。

第三章では、地域社会における「義理」と儀式の変質が論じられる。著者によれば、日本語の「義理」と中国語の「義理」とは意味が異なる。日本語の「義理」は中国語では「人情」「情面」にあたる。中国語における「義理」とは、自己を中心とした血縁を基礎とした親疎関係のネットワークから成り、「義理」は儀式を通じて可視化されねばならない。第 1 節では、「義理」の定義が述べられた後、調査地における儀式の変容の事例が紹介される。近年の葬式では派手なアトラクションが流行になっていること、その際、場合によっては観客を集めるために官能的な踊りさえ行われること、結婚式では新郎の父を「好色漢」としてからかう趣向が見られること、面子競争のために結納金が高額化していること、などの実態が紹介される。著者の見るところでは、近年の地域社会では儀式の内容が空疎化して、従来社会規範の維持のメカニズムとしてはたっていた儀式の機能が失われている。第 2 節では、「整酒風」と呼ばれる宴席の頻繁化と肥大化が取り上げられる。調査地では、結婚披露宴、誕生祝い、家の新築祝い、大学進学などを祝うための宴席が頻繁に設けられ、なかには目的がはっきりしないものまである。こうした宴席には相応の祝儀を持参しなければならないので、その負担は家計を圧迫するほどになっている場合さえある。近年では専門業者が現われ、料理や宴会用の道具や設備、司会者にはじまり、レンタカーからアトラクションの楽団まですべて提供してくれる。宴席を設けることは主催者に金銭的利益をもたらすことが多い。そうすると、村民は自分の出した祝儀を回収しようとして、今度は自分で宴席を設けることになり、悪循環が発生する。著者は、現在の地域社会ではこうしたジレンマを断ち切ることがきわめてむずかしくなっているという。第 3 節では、近年の地域社会での「帮工」の衰退が取り上げられる。「帮工」とは、農村共同体のなかで共同作業をおこなうためにひとびとが自発的に作り上げた互助組織である。ところが、近年では「帮工」を引き受ける人間が少なくなり、その代わりに金銭の報酬による専門業者が現われることになった。著者は、こうした現象の原因として、村への市場経済の浸透や若年労働力の流出を指摘している。

終章「総括」では、本論文で取り上げた伝統文化の衰退、賭博の蔓延、義理と儀式の変質という現象の背景には、現代中国の地域社会における社会関係資本の衰退という共通の原因が横たわっていることがもう一度強調される。そして、地域社会がこうした状態からいかにして回復しうるかという点に関して、著者は若干の指摘をおこなっている。ひとつ

は現代社会の「市場全体主義」的な傾向からの脱却であり、もうひとつは、中間団体の自由な活動に代表される社会的結合の改革である。

終章では、これまでの章で論じられた内容がまとめられ、論文全体としての結論が示されるとともに、著者の若干の提言が述べられる。

3. 本論文の成果と課題

本論文の成果は次の点にある。

第一に、三つの調査地におけるインタビューを中心にした現地調査をふまえて、現代中国の地域社会における社会的・文化的規範意識の変容をあざやかに描き出したことである。この調査で特徴的なのは、著者が村の内部事情にある程度通じた者であったことである。著者が調査対象として選んだ三つの村のうち、ひとつは著者の出身地である。他の二つには著者の親族が住んでおり、著者が過去に頻繁に行き来した経験や、数年間居住した経験のある村である。したがって、著者は調査地において外部の人間として扱われることがなく、そのため外部者では知りえない裏側の事情も直に観察することができた。とくに賭博の蔓延や儀式の奢侈化などを観察する際には、こうした内部者としての立場が有利に働いたと思われる。その結果として、村の現状は生き生きと描写され、現実の中国地域社会が直面する問題がありのままに提示されることとなった。この点は本論文の第一の長所である。

第二に、こうした現地調査を通して得られた観察をもとにして、現代中国における社会関係資本の衰退という大きな問題に取りくんだことである。著者は、おもにアメリカの社会学者パットナムの『哲学する民主主義』『孤独なボウリング』（以上邦訳名）における議論に基づいて、相互信頼・互酬性・社会的ネットワークからなる社会関係資本が現代中国の地域社会で衰退している現状を分析し、その原因を解明しようとした。論述のなかには、パットナムの議論が機械的に当てはめられている部分もないわけではないが、現地調査によって観察された事実を、社会関係資本という高次の概念枠組みに昇華させようとした著者の態度は貴重である。

しかし、本論文にも以下のような弱点ないし課題が見られる。

第一に、論述の際の視点の問題がある。本論文で著者は、村のインサイダーの立場を生かして観察を行ったとしているが、観察者のポジションの問題が論述のなかで十分に表現されていない。学術的客観性を保つためであったことは理解できるものの、せっかく興味深い事例を扱っているが、観察された事実の内在的な論理にまで十分に迫りきれなかった理由がそこにあるように思われる。他の研究やルポルタージュと異なる本論文特有の視点を叙述のなかで十分に表現すべきであった。

第二に、結論部分において、「社会」が「国家」から十分に自立していないことを問題の根源としているが、そこにはやや論理の飛躍が見られる。本論文は農村を中心とする地域社会を論じたものであるが、結論部分では地域社会固有の問題を離れた一般的な議論になっている。本論文で扱われた事例から「国家」と「社会」を論じるに至るためには、何段階かを経た綿密な考察が必要であろう。

第三に、論文全体のうちで先行研究を論じる部分が多いのに比べて、具体的な論述の際にそれが有効に使われていないうらみがある。たとえば、重要な先行研究となる賀雪峰が、中国の農村を「原子化村」と「非原子化村」に分け、後者を「宗族型」「戸族型」「小親族型」「連合家庭型」に細分化していることに触れながら、著者が3つの村を調査して観察した現象が村の「型」の相違に応じてどのように異なるのかが明確に述べられていない。著者が自ら足を運んで収集した数々のエピソードには興味深いものがあるだけに、提示した理論的枠組みに従った分析をさらに推し進めるべきであった。

しかし、以上のような欠点はあるものの、筆者はそれを十分に理解しており、今後の作業において不足を補おうという意識を持っている。なによりも本論文は、中国農村の現状に対する筆者の切迫した危機意識が根底にあるものであり、危機意識の強さのゆえに、論述に問題点をはらみながらも、現在の中国農村を蝕む問題点を明らかにすることが可能になっている。

4. 結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考ええる。

最終試験結果の要旨

2017 年 11 月 8 日

学位請求者 張 成
論文題目 移行期における中国地域社会の文化と風俗の変容
——内陸農村の社会関係資本のあり方をとらえる
論文審査委員 糟谷啓介 鈴木将久 星名宏修

2017 年 11 月 25 日、本学学位規則第 8 条第 1 項に定めるところの最終試験として、学位請求論文提出者 張 成 氏の博士学位請求論文「移行期における中国地域社会の文化と風俗の変容——内陸農村の社会関係資本のあり方をとらえる」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、張成氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって審査員一同は、一橋大学博士（学術）の学位を授与されるに必要な研究業績および学力を 張成 氏が有することを認定し、最終試験での合格を判定した。